

会 議 等 報 告 (要 旨)

会議等名称	： 第1回社会教育委員の会議	
日 時	： 令和3年12月24日(金) 10:00~12:00	
場 所	： 総合文化センター412号特別会議室	
	【社会教育委員】	
	後藤司委員、荒生令悦委員、久保英吉委員、鈴木勝委員、岡部覚委員、阿部公一委員、片桐晃子委員、加藤真知子委員、齋藤彰委員、富士直志委員、庄司憲昭委員	出席 11名
	齋藤嵩史委員、渋谷静子委員	欠席 2名
	【庄内教育事務所】	
出席者	： 高橋千尋主任社会教育主事、那須陽生社会教育主事	出席 2名
	【事務局】	
	鈴木教育長、池田教育次長、齋藤教育次長、岩浪図書館長、平井八幡総合支所長、出嶋松山総合支所長、阿部学校教育課長、富樫指導主事、阿部社会教育文化課長、村井課長補佐、深松課長補佐、小野社会教育主査兼係長、庄司主事、佐々木主事、佐藤専門員	出席 15名
		計 28名
報 告	： 令和4年1月11日	
内 容	： 以下のとおり	

1 開 会

山形県社会教育連絡協議会社会教育功労表彰状を庄司憲昭委員へ伝達。

委嘱状の交付は時間の都合上、あらかじめ席へ配布させていただいた。

2 教育長あいさつ

このたびは、快く社会教育委員を引き受けていただき、感謝申し上げたい。委員の中には新庄市からお越しの方もいて、吹雪もなくよい天気所幸だった。

今日は庄内教育事務所社会教育課からお出でくださった那須先生より、地域学校協働本部についてお話をいただく。その話にも関連するが、来年度より酒田市小中一貫教育が各中学校区を一つの単位として本格的に始動する予定である。最初から完成形でスタートするのではなく、その都度改善を繰り返しながら進めていくことになると思われる。その小中一貫教育のビジョンのさらに根っこの部分、この部分をどのように耕していくかということに一番焦点を当てて取り組んでいきたいと考えている。そのためには、当然、学校教育だとか社会教育だとかにこだわらず、垣根のない取り組みが重要である。そういうことで、本日は学校教育課長からも参加いただいた。また、小中一貫教育に係る地域の参画は、広く捉えれば生涯学習ということにもなるし、社会教育の中でも、内包された家庭教育等のカテゴリーに分けることなく、すべての教育活動が緩やかにつながっていくことが非常に大切なことだと思っている。本日は地域と

学校の連携協働についてお話いただく予定なので、類似の案件として小中一貫教育の本格始動についても資料を配布し紹介させていただいた。

教育委員会としても、今後様々な取り組みを仕掛けていきたいと考えているので、忌憚のない意見を頂戴できれば幸いである。

3 座長の選出

4 座長あいさつ

本日は研修と協議の二本立て。充実した内容となっているようだ。

5 研 修

【テーマ】「おらほの子ども」を地域で育てる

【講師】庄内教育事務所社会教育課 社会教育主事 那須 陽生 氏

6 協 議

◎地域学校協働活動の推進について <意見交換>

委員長	まず、地域学校協働本部の設置について、本市の今後の方向性を事務局より説明いただきたい。
事務局	本日の協議を踏まえ、年明けに市立校長方に頭出しをしていきたい。 実は6年前に県の教育振興基本計画が施行された際、山形方式の総合的な地域学校協働本部の設置が示されている。当時の目標というのは、先に説明のあった地域学校協働本部のような教育プラットフォームを作ることだった。現在後期計画に入り、整備された教育プラットフォームを更に充実させて、積極的に取り組みを進めていきたいと思いますという目標に変遷してきた。地域学校協働本部を整備するのであれば、コミュニティ・スクールも同時に整えなければならないのではないかと考えられるかもしれないが、本市としては既存の形とは異なる姿を目指している。本来、地域学校協働本部は学校が関与しない組織体で、中心は地域学校協働活動推進員である。この地域学校協働活動推進員が学校運営に直接関与するコミュニティ・スクールと地域学校協働本部をつなぐ形が基本となっている。しかし、本市としてはあくまで中心は地域学校協働活動推進員でなく学校を想定し、既存の事業の持続可能性を高めていきたい。教師の異動や地域住民の高齢化などで希薄化したつながりを地域学校協働本部という組織を整備することでカバーするようなイメージ。先に説明した小中一貫教育の先に、各中学校区単位で仕組みづくりをしていきたいと考えている。もちろん、各学校単位の活動もあるわけだが、その活動を制限するものではな

	<p>く、各学校で地域学校協働活動をサポートするような組織があっても構わない。教育プラットフォームを整備するうえでの単位が中学校区というだけで、各学校の活動を総括する推進員を設置する。いずれにしても、学校だけで子どもたちの学びは完結しないうえに、以前は公民館を中心とした地域住民の生涯学習も停滞しているのであれば、この組織体が解決策の一つになりえる。地域では子どもの奪い合いも起きており、例えば地域の教育力向上事業に子どもたちの参加を呼び掛けているけれども、部活動やスポーツ少年団の活動で忙しく参加できないということもあるので、地域学校協働本部で意見を交換しながら進めていければよいと思う。もし今後、コミュニティ・スクールを立ち上げたいという学校が出てくれば、それはそのときに検討したい。</p> <p>実は6年前に県の教育振興基本計画では、県内35市町村すべてで組織の整備を進めるよう取り組んだのだが、すでに学校と地域の連携協働事業はそれ以前より実施しており、改めて組織を整備するメリットが見えづらいことから、なかなか地域に浸透しなかった。しかし、このコロナ禍で学校と地域のつながりはより希薄化し、改めてそのような組織の必要性が見えてきた。</p>
委員	<p>5年前、当時の社会教育係から松陵小学校の放課後の空き時間に地域住民の参画による子どもたちのための活動ができないか打診があった。会議を開き検討を重ねた結果、今年度より「遊びと学びの楽校」を開校することができた。その頃は小学校にどのように英語教育を導入するかという話が出ていたこともあり、英語教育や算数教育、スポーツ少年団に加入していない上級生向けの活動を実施している。富士見や宮野浦でも、夏休みや春休みを活用した類似事業を実施している。この事業を実施してから、近隣の介護施設より一緒に活動できないかと相談された。介護施設に入所している利用者には元大工など様々な技術を持った方がおり、そのような方を子どもたちと関わらせたいとのことだった。また、松陵コミュニティセンターでは「憩いの場」という名称で、介護相談などをテーマとしたコミュニティカフェを実施しているので、その取り組みとコラボレーションできないかとのことだった。このように松陵コミュニティセンターが地域学校協働活動の拠点となりつつあることを実感しているが、現実には様々な問題も出てきた。</p> <p>少し話がずれるが、「遊びと学びの楽校」は本市のまちづくり推進課から補助金をいただいている。この補助金はイベント型の補助金で、年間を通して継続する事業ではなく単発の事業を対象としていた。地域学校協働活動を趣旨としているのであれば、本来、社会教育文化課が担当している放課後子ども教室への補助金を活用するのが望ましいと思うが、こちら</p>

	<p>は逆に年間を通した事業が対象となっており、活用しづらい。宮野浦コミュニティセンターではかつてこの補助金を活用していたが、要件を満たせず事業の継続も難しいと聞いた。補助金のあり方を見直し、活用しやすくしていただけないだろうか。</p> <p>先ほど本市の今後の方向性を聞いたが、学校を中心に据えて地域学校協働本部を立ち上げたいとのこと、個人的には学校だろうが地域だろうが推進員だろうがどこが中心であろうと構わないと思う。「遊びと学びの楽校」を通し、改めてこのような活動は組織が重要なのではなく、そこに関わる個人のつながりが重要であると強く実感している。組織を整備し形を整えることよりも、まずはその基礎となる個人と個人のつながりを見つけ育てていくことのほうが有効だと思われる。</p>
委員	<p>かつて宮野浦小学区では補助金を活用した放課後子ども教室が行われていた。しかし、様々な事情から補助金が活用できなくなり、現在は地域から出資していただき、地域学校協働活動を実施している。その主体も、宮野浦コミュニティ振興会にある少年育成部会の方々が担当し、けん玉大会や紙飛行機大会などのイベントを開催している。また、子どもたちの日常的な居場所づくりということで、小中学生に学習室としてコミュニティセンターを開放してもらっている。このような地域住民の子どもたちへの支援は本当にありがたい。</p> <p>地域学校協働本部の立ち上げについて、学校側から見れば大変ありがたい話である。すべての中学校区へ一斉に導入することは難しいとしても、これまでの活動を踏まえ、実施可能と思われる学校区から試験的に取り組み全市に広げていくというのは一つの手立てではないかと思う。今年度は地域の方からサツマイモの栽培を教わり、学校区にあるスーパーマーケットの一角を拝借し販売まで行った。栽培だけでなく販売や購買を促進するためのチラシ作りまで行うことで、子どもたちは非常に強い達成感を覚えたようだ。本校としては地域から支えていただき、地域の方たちと積極的に関わることで地域への愛着をもった子どもたちを育てたいと考えている。そのうえで、子どもたちが地域のためにできることを意識したい。先の研修の中でもあったが、学校と地域どちらにとってもメリットがあること、WIN-WINの関係であることが持続可能な取り組みの秘訣だと思う。よって、子どもたちが地域のためにできることとして、今年度は学校区内の公園と通学路のごみ拾いを行った。また、高齢者疑似体験を経て、その生活の大変さを実感し、一人暮らしの高齢者へ手紙を送った。</p> <p>地域学校協働本部の仕組みづくりとあわせて、金銭的な支援もお願いしたい。</p>
委員	<p>松陵小学区の「遊びと学びの楽校」設立に携わったが、5年前、当時の</p>

	<p>社会教育係からは、宮野浦小学区で実施していた放課後子ども教室をできないかと打診された。軌道に乗るまで時間はかかったものの、このように実施できてよかったと思う。</p> <p>仕事柄各地区で親子を対象とした事業にお呼びいただくが、そこでも宮野浦のように金銭的な問題を抱えているという話を聞いた。どことはいわないが、これまで市をはじめとした様々な補助金を原資として親子遊び事業を実施していた団体が、補助金を出してもらえなくなり、コミュニティ振興会に出資をお願いした際、コミュニティセンターの主体は高齢者だといわれ理解を得られなかったようだ。宮野浦の場合も、「わんぱくランド」という補助対象事業があったが、補助金を出してもらえなくなったとき、コミュニティ振興会の事業として組み込んでいただいたことで継続することができた。理解を示す地域もあれば理解を得られない地域もある。どれほど高齢者の多い地区でも、子どもたちも地区の一員であるという理解が浸透していないことを痛感した。</p> <p>コミュニティ・スクールというのも社会教育委員の会議において以前より話題になっていたが、どのような仕組みでなぜ必要なかはっきりわからないままだった。今日の研修を通し、少し霧が晴れたような気がしている。他の委員の話にもあったが、すでに各地域では様々な地域学校協働活動が行われており、その中にはコミュニティ・スクールや地域学校協働本部の核になるような活動の種があると思う。その活動を掘り起こせばうまく地域学校協働本部に結びついていくと思う。ひとつ気がかりなのは本市の方向性として、中心が学校ということ。確かに松陵コミュニティ振興会の「遊びと学びの楽校」の運営委員には校長先生も参加しているので、学校と連携してはいるが、地域学校協働活動推進員のような地域のまとめ役の人が中心になってもよい。活動の内容によるところもあるかもしれない。上部組織が指示を出して進めるよりも、すでに存在している活動や地域住民をきっかけにして広げ、浸透させていくほうがよりスムーズに進められると考える。そこがうまくつかめなかったため、「遊びと学びの楽校」も5年の歳月踏み出せずにいた。しかし今日の研修を通し、その部分の理解が深まった。それぞれの地域で話し合いを深めていけば実現は可能だと思われる。</p>
委員	<p>小中一貫教育に関わることといえば、新庄市では今年から一つの中学校と二つの中学校を併合した明倫学園という義務教育学校が設立された。先立って4、5年前には同じ義務教育学校の萩野学園が設立されている。私も萩野学園の放課後子ども教室の一つに関わっている。</p> <p>本日の会議では地域学校協働活動について協議するというので、興味をもって参加させていただいた。事前にいただいた資料には学校関係者の</p>

	<p>参加がなく、地域と学校が連携していく事業について協議するのになぜだろうと不思議だったが、学校教育課長と指導主事が急遽参加されたとのことですばらしいと思った。やはり、学校と地域が連携していくのであれば社会教育だけでなく学校教育側の協力も必要であり、ともに作り上げていく姿勢が大切だ。そのために、昔からいわれている学社連携というのが、必要になってくるのだと思う。また、研修の中で話された地域学校協働活動推進員について、地域側の統括者が推進員であるならば、学校側は誰がその役を担うのか。校長なのか教頭なのか、教務主任なのか。そのあたりも詰めなくてはいけない。新庄最上8市町村では、平成6年より学社連携推進員という役職を学校の中に位置づけている。そのような役割の設置も検討してはどうだろうか。</p>
委員	<p>私は個々の事例には携わっていないが、気づいたところを意見したい。研修資料にある社会教育法第5条第2項にある「学校」とは、小学校・中学校の義務教育を指しているという認識でよいか。高等学校は含まれているのか。</p>
教育事務所	<p>高等学校も含まれる。</p>
委員	<p>地域学校協働活動を推進していくうえで、行政からの働きかけが強いと仕組みづくりのみが目的となって自己満足や疲弊感が発生してしまう。やはり、子どもたちをどう育てるかということが一番重要である。子どもたちが育ち地域で活躍することで、地域住民もやりがいや成長の喜びを共有することができる。子どもたちに成功体験を積ませることが大事である。酒田市小中一貫教育ビジョンでの「教育目標と目指す人間像」は立派だと思うが、達成したかどうかの評価が難しい。そこで提案だが、この目標に地域課題の解決を組み込んではどうだろうか。例えば、本市の課題の一つである高校卒業と同時に発生する若者人口の社会減に対し、解決までは至らなくとも熟考する。本市の現実的な課題について考えることで、地元への愛着が育まれると思う。</p> <p>また、先の社会教育法の「学校」について、高等学校まで内包されているとのこと。小中学校を通し連続した地域とのつながりがあっても、高等学校への進学でそのつながりが切れると忘れてしまうのではないか。小中学生が対象の活動を通して目指した人間像を、どのように高等学校へつなげていくかが課題である。</p> <p>もう一つ気になるのは、地域学校協働本部について、社会教育文化課はどのように関わっていくのか。この組織の一員なのか、組織には参画せず監督する立場なのか。トラブルが発生した際の対応が行政の仕事なのではないだろうか。</p>

委員長	社会教育法における「学校」は幼稚園も含まれる。幼小中高を通した支援が必要なのかもしれない。また、地域学校協働本部と行政の関わりについては私も気になっていた。
教育事務所	酒田市には社会教育文化課に各コミュニティ振興会を担当する社会教育指導員が在籍している。地域学校協働本部が立ち上がった場合、それぞれ地域学校協働活動にアドバイスする等、組織と行政が相談しあえる橋渡し役になりえると思う。
委員長	主体は社会教育文化課だが、学校教育課はどのように関わってくるのか。本市の仕組みを作る上で検討していかなければならない。
委員	子どもたちが主体となって、様々な団体が活動を行っていくということで、教員が立ち会わない場面が想定される。その際、事故等予期せぬ事態が起こった場合、適切な対応ができるようマニュアルを整備しておくべきだ。実質的な主体は地域学校協働本部だろうが、トラブルへの対応は行政の責任と考える。
委員長	他市町村ではそのようなマニュアルは整備されているのか。
教育事務所	地域学校協働本部を立ち上げる際に規約を作成する。その規約に安全対策についても盛り込むことが定められている。
委員	<p>コミュニティ・スクールを知ったのは、この社会教育委員の会議を通してだった。教員の負担を減らすという目的もあると聞いた。市内の学校はそれぞれ規模も異なるため、コミュニティ・スクールがすんなり溶け込む学校に溶け込まない学校に様々だと思われる。行政としては学校に対して導入するかどうか選択する余地を与えてほしい。遊佐町はすべての学校にコミュニティ・スクールを導入しているが、メリットが聞こえてこない。そもそも都会の仕組みである以上、地域学校協働本部も導入することでどのような変化があるのか予測できない。</p> <p>また、以前から気になっていた小中一貫教育について、前教育長が打ち出したビジョンだが、例えば浜田小学校は、二つの中学校に分かれて進学する。このような進路の児童に対して具体的にどのように対応するのか。</p> <p>地域学校協働活動についても小中一貫教育についても慎重に進めてほしい。</p>
委員	12月6日に開催されたコミュニティ振興会職員向けのスキルアップ講座に参加した。その際に、講師からコミュニティ・スクールについて教授いただいた。各地区に公民館があった時代は、ふるさと学習と銘打って類似の事業が行われていた。現在は、コミュニティ振興会の「地域の教育力向上事業」に引き継がれている。このような変遷の中で自分が感じていることは、現在の親世代が地域文化、歴史に触れる機会がなかったことである。子どもに対する教育よりも親世代に対する教育のほうが重要だ

	<p>と思う。親世代への教育を充実させることで、本市が目指す教育目標に家庭教育の側面から協力していただけるのではないかと。</p> <p>現在、「地域の教育力向上事業」では年6回程度小学生向けに事業を実施しているが、事業を実施できるのは学校や家庭の協力があってこそである。これ以上課外活動を増やすことで、学校本来のカリキュラムに影響が出るのではないかと不安である。</p> <p>コミュニティ振興会では高齢者を中心として事業を展開しているところがあるとの話が出たが、これほどまでに高齢者の福祉・医療が充実している時代はないため、個人的にはもう十分なのではないかと思う。やはり、今後の時代を担う子育て世代や子どもたちに軸足をおくべきだと考える。</p> <p>小中一貫教育について、なぜ同じ子どもでありながら幼稚園・保育園の子どもたちは含まれないのか。生まれた時から誰一人取り残さない教育が、行政の責務ではないだろうか。</p>
委員	<p>人生の先輩方の意見を聞かせていただき、とても勉強になった。私も3人の小中学生の父親で、自分の子どもたちがこれからこの仕組みに関わっていくことを考えていた。研修を受けても、理解しきれなかったというのが正直なところだ。コミュニティ・スクールという仕組みは初めて聞いたが、地域で子どもを育てることの重要性は実感している。実際、私は現役の子育て世代であるが、自分の子ども時代と自分の娘息子の子ども時代と、地域住民との関わり方は大きく変わっており、社会の変化を感じた。</p> <p>これまで青年会議所では、酒田まつりや山鉾の作成に携わっており、その中で歴史や文化の伝承として有識者や知識経験のある地域住民と子どもたちが関わる機会がある。私は、子どもたちがその経験を通してどんどん成長していく姿を目の当たりにしてきた。地域で子どもを育てていくことで、地域づくりにも結びついていく。</p> <p>今の子どもたちは何に興味を持っているのか。現代社会は、現在60歳代70歳代の方からは考えられないような多様性を受け入れる社会となっている。例えば、LGBTやジェンダーの事柄は、私ども子育て世代でも想像できなかったことだが、子どもたちは素直に吸収していく。地域学校協働本部の中心は、学校ではなく子どもではないだろうか。もちろん子どもを育てていく上で学校は重要だが、子どものもつ現代の価値観をベースとして地域学校協働活動を実施していく。その活動が最終的に地域づくりにつながり、ほかの委員がいていた郷土愛の醸成、人口の社会減を抑制するのではないだろうか。</p> <p>本市は、若者の流出が著しい自治体であるが、問題は出ることでなく戻ってこないことだと強く思う。別の都市で勉強し知識を身に着けた若者が本市に戻ってくるためには、やはり子ども時代に地域住民と関わる環境の</p>

	<p>中で育まれた郷土愛が重要である。大人が子どもに伝えたいことと、子どもたちが求めることのどちらの視点も疎かにしてはならない。</p>
委員	<p>地域学校協働本部は、子どものために整備されなければならないということがとても大事な視点だと思う。多様化していく社会において、親の考え方も非常に多様化しており、その多様化した考え方に合わせるということが難しくなっている。社会教育文化課と合同の事業で各小学校を訪問した際、地域住民と学校との関わり方も多様であると感じた。私は生まれが旧酒田市内であり、比較的地域のつながりが希薄な地域で育っているが、それでも89歳の母は子どもたちが地域の高齢者へ書いた色紙を宝物のように仏壇に飾っている。家の近くに幼稚園があり、その園児たちの散歩の時間、母は家の外で通りかかるのを待っている。子どもたちが地域住民へ与えるパワーというのは計り知れないと思った。地域のつながりというのを日々感じている。</p>
委員	<p>私も現役の子育て世代として意見させていただく。東部中学校では昨年度から今年度にかけて、ジェンダーに配慮した制服や学校評価アンケートにおけるLINEの活用、中間・期末テストの廃止等大きな変化があった。保護者としては急な変化に学力低下を危ぶんでいたが、学校側からは今が東部中学校の分岐点と聞いている。その背景には、おそらく教職員の働き方改革があるのではと思っている。今朝のニュースでも科目担任制や教職員の増員に政府が乗り出すとあった。子どもは減っていても教職員は増員しないと労働条件を改善していくことができない。これからは、ある程度ビジネスライクに、教員の管轄と家庭・地域の管轄を区切っていく方向に変わってきたのかと思う。保護者会においても同様に縮小傾向で、さらにできるだけ意欲のある方、負担に思わない方に協力していただく方針となり、引いては教員や保護者の負担軽減を狙っている。しかし、宗教家として思うのは、人間は関わらないと生きていけないし、学校の中だけで教育が完結するのではない。高齢者においても自身の経験を語る場がなければ、これまで蓄えられた知識や経験を黙ってお墓に持っていくこととなる。それは、あまりにも寂しい。</p> <p>少子化や高齢化等、地域が抱える問題について、世代の違う者同士が結びつき関わり合いを大切にしながら、学校を中心に地域づくりに取り組んでいく。これが政府の示す方向だと思う。</p> <p>地域学校協働本部に関わる住民への声掛けというのは行政から来るのか、学校から来るのか、自治会から来るのか。本市でもモデルケースだけでなく全市的に取り組んでいく時が来ると思うが、声をかけられたときには、ぜひ自分ができることで協力していきたいと強く思う。</p>
委員	<p>「新日本紀行」という番組をご存知だろうか。先日、真室川町を取り上</p>

	<p>げていた。昭和55年当時に撮影された様子と、現在の様子を放送していた。わらべ歌の伝承についてだったが、昭和55年当時は存在していた小学校は現在廃校となり、当時の指導員も高齢となっていた。それでも地域の子どもたちは、約40年前と同様に集会所に集まり、地域の方からわらべ歌を教わっている。伝統文化や伝統芸能の力はすごいと感じた。地域学校協働活動の中でもそのような伝統文化や伝統芸能を一つの足掛かりにしては面白いのではないだろうか。</p>
--	--

7 その他

今回の会議録は本市のホームページ上で公開される。ご理解いただきたい。

8 閉 会